

メンデル

日本メンデル協会通信

No. 32 — Jan. 2018

発行所 (公財) 日本メンデル協会 本 部 東京都文京区本郷 2-27-2 エスペランサ V 内
電 話 03-3814-5675 Fax 03-3814-5352

発行日 2018年1月12日 発行人 河 野 重 行

会長挨拶

河 野 重 行

(公財) 日本メンデル協会会長

初代会長の篠遠喜人先生によれば、日本メンデル協会が任意団体として設立されたのは、33年前の1984年12月10日のことです。翌1985年には長野県教育委員会を主務官庁とする財団法人に指定され、1990年になると任意団体であった国際細胞学会が日本メンデル協会に加わり、その機関誌であったキトログア (CYTOLOGIA) の刊行母体となり、2013年9月2日には公益財団法人に認定され今日に至っております。

私が日本メンデル協会にかかわるようになったのは、黒岩常祥先生が第4代キトログア編集長をお引き受けになった1993年頃からです。当時、黒岩常祥先生の研究室は東京大学本郷キャンパスの南端にある理学部2号館にあって、日本メンデル協会があった本郷2丁目の東真ビル (現エスペランサ V) とはつい目と鼻の先でした。私が、東京大学の黒岩先生の研究室に所属していたのは1988年1月から1999年3月まで、その頃は論文の査読を随分手伝わせていただきました。また、1990年に国際細胞学会と日本メンデル協会が合併した頃やその後の運営のご苦労などもよく存じ上げております。

第6代日本メンデル協会会長の廣川秀夫先生から依頼され、私が日本メンデル協会副会長とキトログア編集長を黒岩先生から引き継いだのは2007年のことです。編集長を11年も務めたこととなります。11年というのは随分長いようですが、黒岩先生の14年に及びませんし、初代編集長の藤井健次郎先生は24年 (1929-1952)、第2代編集長の篠遠喜人先生

は37年 (1953-1989)、第3代の田中信徳先生は3年 (1990-1992) 編集長を務めておいでです。第4代の黒岩先生から私が第5代編集長を引き継いだ頃は、世界がIT化に大きく舵をきった時期で、電子メールによる投稿に切り替えるところから始め、インパクトファクター (IF) を復活させ、Web投稿システムを導入するところまで漕ぎ着けました。ここで編集長は第6代目の日詰雅博先生に替わりますが、これからのキトログアの発展が楽しみです。

日本メンデル協会は、第7代会長の長田敏行先生のご尽力で、2013年に公益財団法人化し、2016年には下諏訪町の諏訪湖博物館・赤彦記念館で念願の「メンデル特別展」を開催しており、ギャラリートークやメンデル講演会は大盛況でした。公益財団法人日本メンデル協会の定款には、遺伝学の普及・振興と遺伝学の祖メンデル (J. G. Mendel) の業績の顕彰を行い、社会における細胞遺伝学と細胞生物学の理解を深めることを目的としており (第3条)、第4条2項には「収集したメンデル資料の一層の充実とその整理、さらに一般公開事業の推進」とあります。事業を規定した第4条にはこの2項の他に、5項が定められていて、「講演会開催」、「キトログア刊行」、「キトログア優秀論文の顕彰」、「優れた研究の顕彰と助成による国際交流」と「その他の事業」となっています。初代会長の篠遠先生は下諏訪町に「メンデル記念館」を建設することを夢見ておりました。その夢はかないませんでした。着実に歩を進め遺伝学の普及や国際交流の先には、チェコのブルノにある「メンデル博物館」との連携などもあるもめるように思います。この博物館はメンデルがエンドウの遺伝の実験をした修道院が改装されたもので、メンデルがエンドウを植えた小さな庭も残っています。

会長以下新執行部としては、第2回メンデル特別展に照準を合わせて、準備万端足りなくするのが最も着実でしょう。第1回メンデル特別展は、諏訪大社の最大行事の式年造営御柱大祭大祭すなわち「御柱」の年だったので、次も御柱の年がいいでしょう。御柱は数え年で7年に一度なので、次は2022年になります。2022年は奇しくも「メンデル生誕200年」で、チョコをはじめ世界中で関連イベントが開催されるでしょう。日本でも御柱と絡めた独自の「メンデル特別展」が生誕200年を記念して開催できればと思っています。日本メンデル協会の今後の活動にご期待ください。

CYTOLOGIAの今とこれから

キトロギア編集長

日 詰 雅 博

この度キトロギアの編集長を仰せつかりましたが、こんな日が来るとは思いませんでした。日本初の遺伝学領域の国際学術雑誌であるキトロギアの歴史については、本誌29号(2015年)に前編集長の河野先生が紹介されていますのでご覧ください。ここでは、キトロギアの現状とこれからについて簡単に紹介します。

今回の編集長交代の時期に大きく変わったことがあります。それはキトロギアが電子投稿システムを導入したことです。昔の論文投稿や編集のやり取りは、航空便や郵送で行われて、その過程で時間がかかっていました。河野編集長になって電子メールで行われるようになっていました。しかしながら、著者や査読者とのやり取りに時間がかかっていたこと、投稿後の論文の整理や管理が煩雑であることや、著者からの問い合わせに時間を取られることが問題であったと聞いています。この度、JSTの支援を受けて、Editorial Managerをベースにした電子投稿システムを2017年4月から導入して、9月から本格運用を始めました。右上の図はキトロギアの投稿システムのhomepageの最初の画面です。キトロギア独特の色の表紙とテクニカルノートのカラー写真を掲載しています。URLは次

の通りです。 <http://www.editorialmanager.com/cytologia/default.aspx>



このシステムの利点は、すべての著者の投稿から査読結果の報告まで行うことが出来ることです。投稿情報や投稿原稿の管理をシステムがして行ってくれますので、煩雑さや人為的なミスの発生を減らすことが出来ます。また、著者は自分の投稿がどの段階にあるかをシステム上で知ることが出来ますので、問い合わせがほとんどなくなりました。

投稿から受理までの流れは、次の通りで、すべてシステム上で行われます。各段階で必要な情報(「投稿がありました。」「査読が終わりました。」とか)はそれぞれ担当の事務局や編集者にシステムからメールで通知されます。それを見て投稿システムをチェックすればよいようになっています。

- ①投稿者が個人情報を登録し、原稿をアップロードして投稿します。
- ②事務局が原稿を確認(テクニカルチェック)します。ここが重要で、形式的な要件を整うまでやり取りして、原稿を査読しやすい形にします。
- ③事務局がテクニカルチェックを終えた原稿は、エディターに送られます。エディターは適当な専門家に査読を依頼します。
- ④査読者は依頼を承諾することも拒否することもできます。承諾した査読者はシステムから査読原稿(PDF)をダウンロードし、査読し、査読結果をシステムを通じて事務局へ報告します。査読者2名の査読が終われば、システムからエディターに査読が終わったという連絡があり、エディターは著者に査読結果を通知します。

⑤これを繰り返して、投稿論文が受理になります。

⑥受理した論文は、システムから離れて、これまで通り、英文校閲後、印刷になります。

システムは出来たのですが現在の問題は、投稿論文の内容を専門とする研究者が少ないので、査読者をさがすことが難しいことです。

現在の投稿は、インド、東南アジア、中東、アフリカ、南米などの国から多く、研究内容は各地域の植物、動物(哺乳類、魚類など)、シダなどを材料にして、その染色体数決定、核型分析、分染法や化学物質などの細胞への影響など細胞学や細胞遺伝学分野の研究がほとんどです。これらの国では人為的あるいは気候変動による自然環境の破壊や変化により、多くの生物の絶滅が危惧されるようになっていきます。それらを現地で保護することはもちろん大切ですが、標本とともに基本的な染色体データを残していくことは、今後の生物資源の保護・活用に必要かつ重要なことと考えられます。また、染色体研究では生きた材料を入手することが必須ですので、特に有用あるいは希少な生物の場合、生物多様性条約などにより生物の移動が難しくなっており、原産国の研究者しか研究できません。このような状況の中で、キトロギア役割は、細胞遺伝学・細胞生物学分野の最新の研究成果を掲載するのはもちろんですが、もう一つは古典的な細胞学や細胞遺伝学の研究を行っているアジア、アフリカ、南米の国々の研究者に研究成果の発表の場を提供して、彼らの研究を振興することです。この観点で、現在キトロギアは科学研究費補助金学術情報の国際発信力強化の助成を受けています。

編集委員が力を合わせて、キトロギアを創刊当初の志で細胞遺伝学・細胞生物学分野での一流の雑誌を目指して努力しています。容易な道ではありませんが、キトロギアはすべての生物の細胞遺伝学から細胞生物学もちろん分子生物学まで門戸を開いていますので、皆様にもぜひご投稿、また、周りの方にキトロギアを紹介して最新の研究成果を投稿いただけるようお勧め頂けると幸いです。今後とも、キトロギアの刊行に関してご支援とご協力をお願いいたします。

退任の弁

長 田 敏 行

新会長の就任の挨拶、新編集長の言葉と並んで、私はなお理事には留まっておりますが、会長退任の弁を述べます。実は、会長在籍が10年にも及び、その期間がいかにも長すぎるので、そろそろ退任した方がいいと何度か思いましたが、そうもいかない事情がありました。その辺の事情を協会関係諸兄姉に知っていただく方がいいと思うので、それらを今回の弁に込めます。

まず、その第一点は、皆様も日本メンデル協会が1984年に発足し、1985年から長野県教育委員会を主務官庁とする財団法人となり、下諏訪町を本拠にし、東京は支部として活動してきたことをご存知と思います。そこで引き続いて学会活動を続けることは、我々の財政的負担で実行できるので、そのまま続行する可能性を追求したのですが、下諏訪町の事情でそれはできませんでした。その結論を得るまでに相当時間がかかったことは事実です。

第二点は、公益法人改革の法令が施行してからの手続きに第一点の事情は影響し、内閣府からの予備調査に際しても、本拠を変更するためにはどのようなプロセスを経るのが良いのかの手順がはっきりしませんでした。そのため、相当時間をロスすることになり、途中で放り出すにもいかず、時間だけがどんどん経過していきました。しかし、2012年の暮れになってから、内閣府の担当官がとにかく一旦長野県で公益財団法人の認定を受ければ、後で事務局を東京へ移すことは書面上の手続きだけで可能であるという示唆をしてくださったことで、それまでの課題は一挙にクリアーできました。この間に、日本メンデル協会設立の動機やキトロギア(CYTOLOGIA)を刊行してきた国際細胞学会との関係など、これまでどなたからも伺っていなかった経過が明らかになりました。これらは記録に残してあるので、ご興味ある方にはお知らせすることもできます。要するに、我が法

平成 29 年度 市民講座「メンデル講演会」の記録

本年は2人の講師をお願いして下記の要領で開催しました。詳しくは日本メンデル協会のホームページをご覧ください。

第15回メンデル講演会は、2017年12月2日に、長野県下諏訪町町民センターで、馳澤盛一郎博士(東京大学大学院新領域創成科学研究科教授)と石浦章一博士(東京大学名誉教授・同志社大学生命医学部教授)を講師として開かれた。

馳澤博士は、「細胞を視る、測る!」と題する講演で、細胞内の微小管やアクチン繊維を蛍光タンパク質で標識して、その動的挙動を可視化する手法で細胞分裂の詳細を示した。これらの方法の応用でガン細胞の識別も可能にできるという可能性を示された。また、石浦博士は、「脳の老化を防ぐ」について述べ、いずれの人も関心を持つ老化に関して、まず、健康な生活を送るために注意したらよい基本が肝要であると話された。また、それが老化の進行を抑止するのにも重要で、遺伝的に問題となる例は少ないが、それはどのようなものであるかを具体的に話された。出席者は70名余であり、質問も多数出され、大変盛会であった。



下諏訪町民大学「メンデル講演会」のご案内

主 催：公益財団法人 日本メンデル協会
主 管：下諏訪町教育委員会 (下諏訪町公民館・諏訪湖博物館・赤彦記念館)
期 日：平成29年12月2日(土)
時 間：13:30~15:30
場 所：下諏訪総合文化センター 2階 集会室
参加費：一般 100円 (高校生以下入場無料)

講 演

脳の老化を防ぐ

東京大学名誉教授・同志社大学生命医学部特別客員教授 石浦章一先生

私たちの脳の神経細胞は40歳を過ぎると必然的に減少しますが、過去の記憶は鮮明に保持されています。しかし、老化に伴う高次機能の低下は気がつかないところで起こっております。今回は、その例を提示し、老化を防ぐ方法についてお話し致します。

細胞を視る、測る!

東京大学大学院新領域創成科学研究科教授 馳澤盛一郎先生

細胞の姿は顕微鏡でみることができますが、最近では細胞内のダイナミックな変化を高速撮影し、その画像を計測していろいろな情報を引き出すことができるようになってきました。植物細胞から癌細胞までいくつかの例をお目にかけてみたいと思います。

(公財) 日本メンデル協会役員 (2017年6月より)

理事会 (任期2年)

会 長	河野重行	東京大学名誉教授
副会長	日詰雅博	キトログリア編集長・愛媛大学名誉教授
理 事	松永幸大	東京理科大学理工学部教授
理 事	数藤由美子	国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構放射線医学総合研究所 放射線計測・線量評価部門
理 事	川岸郁郎	法政大学生命科学部教授
理 事	長田敏行	東京大学・法政大学名誉教授
監 事	平野博之	東京大学大学院理学系研究科教授
監 事	山口正視	千葉大学真菌医学研究センターグランドフェロー

評議員会 (任期4年)

評議員	草場 信	広島大学大学院理学研究科教授
評議員	酒井 敦	奈良女子大学大学院自然科学系教授
評議員	佐甲 (永田) 典子	日本女子大学理学部教授
評議員	佐野俊夫	法政大学生命科学部教授
評議員	田中一朗	横浜市立大学名誉教授
評議員	塚田為康	(一般財団法人) 和田薫幸会理事
評議員	中村宗一	琉球大学理学部教授
評議員	中村俊夫	信州大学名誉教授
評議員	馳澤盛一郎	東京大学大学院新領域創成科学研究科教授
評議員	東山成江	名古屋大学大学院理学研究科准教授
評議員	宮村新一	筑波大学大学院生命環境科学科准教授
評議員	邑田 仁	東京大学大学院理学系研究科教授

編集後記

日本メンデル協会通信第32号をお届けいたします。本号は、2017年6月に、当協会の新執行部が発足いたしましたので、河野新会長からは就任の挨拶、日詰副会長からは、キトログリア編集長就任の意気込みと編集に関する大幅な改善がなされている状況について述べていただきました。また、会長を退任した長田からは、退任の弁が寄せられております。今回は、丁度恒例の長野県下諏訪町での「メンデル講演会」が終了した直後であり、その盛会が伝えられておりますので、このことをお伝えできることは幸いであると思っております。なお、「メンデル通信」は、一方的なお知らせの手段とは思っておりませんので、お読みになったご意見や感想をお知らせくだされば取り上げたいと思っておりますことも申し添えます。

長田敏行